四境の役一五〇周年連載コラム⑬

大島商船高等専門学校　准教授　田口由香

▼四境の役と明治維新

慶応二年（一八六六年）六月七日に開戦した四境の役は、大島口に続き、芸州口・石州口・小倉口のすべての戦闘地で長州藩が優位に戦いました。そのなか、七月に将軍徳川家茂が急死し、一橋慶喜（十二月に将軍就任）が代わりに出陣することになりますが、八月一日に小倉藩が城に火を放って撤退したため出陣を中止し、軍艦奉行の勝海舟に休戦交渉の使者を命じました。九月二日、宮島の大願寺において勝と長州藩の広沢真臣・井上馨らが休戦協定を締結すると、幕府は芸州口・石州口に出兵しているすべての藩に引き揚げを命じ、翌年一月には孝明天皇の大喪による解兵令を布告しました。事実上、四境の役は長州藩の勝利で終結したと言えます。そしてそれは幕府の権力失墜を示すことになり、急速な討幕への動きにつながっていくことになります。

慶応三年（一八六七年）九月、長州藩と薩摩藩・広島（芸州）藩は薩長芸出兵協定を締結し、幕府に対する挙兵を計画します。十月十四日、将軍徳川慶喜によって政治権力を朝廷に返上する大政奉還が出されますが、十二月九日には王政復古クーデターが決行され、大号令が発せられました。ここに鎌倉幕府以来続く武士政権は終わり、明治新政府による新たな近代国家づくりが始まることになります。四境の役は明治維新の突破口を開いた戦いと位置づけられるのです。

◎連載コラムは最終回です。

四境の役一五〇年記念大島丸講座やシンポジウムにもご参加ください。

▲明治百年記念公園（周防大島町久賀）

13　周防大島の文化財　荒神様のバクチノキ

周防大島町内入、荒神様のバクチノキは県下で最大級である。バクチノキは南方系の植物で、瀬戸内側と日本海側の大変暖かい所、主に島や島であった所に分布する。日本列島では琉球方面に行くと多くなる。内入のバクチノキは以前に栽植されたものか、種子が飛んできたものかは不明である。ただし、県内外で大きな木は大抵荒神様か明神様などにある。バクチノキはビランジュ（枇蘭樹）とも言われる。樹皮が大きくはげ落ちた後の根幹が赤くなるので遠くからでもすぐバクチノキと分かる。和名バクチノキ（博打木）は、博打に負けて裸になるのに例えたという。内入の木は、高さ 11.0 m、幹の目通り幹囲 138 ㎝。毎年 10 月中旬に白く開花し、幼実のまま越冬し、6 月頃茶褐色に成熟する。実がなるが、人間は食べることができない。名前が面白く、樹幹が真っ赤になる特性があるので見に来る人は多い。

《町文化財保護審議会委員　南　敦》